【研究論文】

縄文時代集落考　（Ⅰ）

後　藤　和　民

はじめに

明治１０年のエドワード・S・モースによる東京都・大森貝塚の発掘は、わが国における近代考古学の出発であった。それは一つの新しい歴史科学の誕生であり、学史上特筆すべき金字塔にはちがいない。ただ、その後の研究の動向をかえりみるとき、そこには極めて重要な認識が欠如していたことに、いまさらながら慨嘆せざるをえないのである。

明治１０年といえば、わが国が３００年という永い鎖国の冬眠から覚めてまだ日も浅く、維新の偉業が成功したとはいえ、時あたかも「西南戦役」という狭隘な内紛に国中が動揺していた。歴史研究においても、国学や水戸史学を中心とする皇国史観が隠然として絶対的権威をもっていた。わが国の古代史としては、「是迄の人には『古事記』、『日本書紀』より以前には遡ることが出来なかった」（註１）のである。この貧寒さに愕然として気付いた者が、当時ほとんどいなかったところに、すでに日本人の近代的歴史意識の欠如があった。

だからこそ、モースによって日本に石器時代の存在が知らされても、当時の歴史家たちはさほど驚嘆も感動もしなかった。むしろ、「日本の国学者は日本にさういう時代の有るべき筈はないと云って大変反対」（註１）したのである。

新しい考古学の出発は、ただ単に、遺物や遺跡という新史料の発見や、その研究の科学的技術の導入、あるいは「石器時代」の発見などという皮相的な問題のみではない。むしろ本質的には、一つの新しい歴史意識や史観の出発でなければならなかったはずである。

かって、皇室や王侯・貴族を中心とする神話や帝紀や中央集権的政治史しかもたなかった日本人が、近代考古学の導入によって、実は忽然として、名もなき民衆の生活史を国民自身が直接所有することができたのである。そこには、当然ながら、民衆の歴史意識の開眼や史観の一大転回があり、歴史を新しく書き替えるべき必然性があったはずである。

ところが、その後の日本考古学の進展をみても明らかなように、江戸時代以来の古物愛玩の骨董趣味や珍品収集主義、あるいは皮相的な風俗論や荒踏無稽な人種論などに明け暮れていた。新しい歴史意識によって新しい歴史を記述しようとする志向性は、当時どこにも見出されなかった。

もちろん、科学の進歩には、もとより営々と積み重ねるべき基礎的条件があり、一歩一歩踏破しなければならない発展の段階がある。考古学が一つの歴史科学である以上、そこには当然、史料の収集やその史料価値の定着のため、諸々の科学的調査が伴い、その技術の開発が必要となる。また、歴史学が時空の科学である以上、史料の時間性と空間性を規定すべき方法も確立しなければならない。従来の遺物・遺跡の収集、その分類整理、土器型式による編年や分布の把握など、それらが考古学の基礎的な研究として、重要かつ不可欠なものであったことは論ずるまでもない。しかし、それらはあくまでも手段的方法論であって、それ自体は決して目的ではない。しかも、その方法論の妥当性や有効性は、その本来の目的意識によってこそ、はじめて規定しうるものである。

そもそも、歴史は記述されてはじめて存在するのであって、考古学とて歴史記述こそ本来の目的とするところである。歴史的内容や意義を記述しえないような、ただ末梢的な方法論や技術論、あるいは資料提供のみに止まっているかぎり、それは決して歴史科学とはいえないのである。ならば、果して日本の考古学は、これまでにどれほどの具体的な歴史記述を可能ならしめてきたであろうか。

たとえば、縄文文代を語るとき、それを石器時代といい、狩猟・漁撈文化といい、あるいは土器

によって名付けられた「勝坂式文化」とか「阿玉台式文化」とかを語ることが多い。ところが、その文化の主人公である当時の人間集団をいかにして捉えてきたであろうか。この人間集団の把握なくしては、もともと文化も歴史もありえないはずである。考古学においては、従来、それがもっとも困難な課題であり、残念ながら、いまだにこの人間集団を的確に規定しえたという確信は、どこにも見出されないのである。

現今、土器型式の細分が活発化し、そこに認識された文様や形状の微細な特徴の類型化によって、その土器型式をそのまま人間集団に置き換えようとする試論が大いに流行している（註２）。しかし、もともと編年の手段的概念として便宜的に仮設した「土器型式」なるものが、果して全く違った他目的対象である人間集団そのものを把える上で、どれほどの有効性を有するのであろうか。また、土器型式によって規定されるべき人間集団とは、具体的にいかなる実体をもつものであろうか。われわれは、もともと手段的概念であった土器型式を、いつの間にか目的的概念に置き換えているのである。この根本的な錯覚や誤診に気付いているのは、筆者ばかりではあるまい。

この「土器型式」という使い古された概念に、新しい属性や付帯的な意義や解釈を発見したり添加しようという試みは、すでに無意味であり、無駄なことである。そのような錬金術的な期待や試行錯誤をくり返えすよりも、われわれが早急に解決しなければならない重要な課題がすでに山積しているはずである。とくに、土器型式による縄文時代の仮設的な編年が一応網羅された今日、その「時間的尺度」としての有効性を吟味するためにも、また新しいメルクマールを設定するためにも、その手段的概念によって、本来の目的である文化内容の時間的・空間的定着を試みなければならないのである。

そのとき、集落の把握こそは、まさにその総括的・中核的位置を占めるであろうし、とくに、人間集団を把える上で、もっとも直接的な実体であり、土器型式よりははるかに有効な概念であることは明らかである。すなわち、筆者は人間集団そのものを包含し、その文化活動の求心的原点となった「集落」という観点に立って、縄文時代の文化のさまざまな様相を有機的に統合することによって、その中心となる人間集団そのものの実体を捉えたいと思う。また逆に、集落という概念によって捉えられた人間集団を中心にして、果して縄文文化はどのように定着され、それによっていかなる歴史記述が可能となるかを確かめてみたいのである。

なぜならば、縄文時代という「名もなき民衆の生活史」を記述しようとするとき、その人間集団の生活基盤であり、その存在の具体的な実体であり、しかもその人間集団の志向性がもっとも集約的に結実している場所は、集落以外にはないと確信するからである。それがまた、ここに縄文時代の集落に関する一考察として、つたない試論をあえて提示する以所なのである。

なお、以下の記述においては、まず序論として、従来の研究史上から、われわれの観点に大きな影響を与え、その先入観となっている先覚の研究成果やその観点を拾い上げ、その中で、従来、縄文時代の文化や集落がどのように把握されていたかを再確認しながら、筆者の観点と志向性を明白にしておきたい。

次いで本論としては、集落を捉える上の前提条件として、立地や分布などからその自然的条件を把握し、それを基盤として展開された生産形態の諸様相を概観する。そして、それらの自然的・外部的要因に対して、集落の規模や形態や構造がどのように変貌していったかを分析しつつ、集落を維持してゆくために、集落の内部において、いかなる社会規制がおこなわれ、いかなる人間集団が構成されていったかを摸索する。その中で、従来の諸説における問題点を指摘し、当時の人間集団を捉えるための可能性と限界性を確認する。

最後に結論として、筆者の観点や方法論に基づき、従来の発掘資料や研究成果によって、果してどこまで集落や人間集団の把握ができるか、そして、いかなる点において何が欠落しているか、それを補完してゆくためには、今後どのような観点や方法が必要となるかを指摘したいと思う。

もちろん、この縄文時代集落に関する研究は、筆者の一生涯を賭けても到底かなわぬ、重厚にして深遠なる課題である。この試論はあくまでもそのごく端緒に触れたものに過ぎず、大方の叱正を求めんがためにこそあえて提示するものである。

第一章　序　　論

第一節　縄文文化の段階的把握

近代考古学が伝来する以前から、日本においても、単なる古物趣味ばかりではなく、遺物の収集や遺跡の発掘によって、真剣にその歴史的意義を解明しようとする学究的態度が、全くなかったわけでは決してない（註３）。ただ、それらの研究は、その根底において、遺物や遺跡の属する時間性を規定する理論的体系がなかったため、ついに科学とはなりえず、現に、その収集された遺物や遺跡によっては、文化内容や歴史的意義などを把握することも記述することもできなかったのである。

この意味においても、文化の内容をその発展の段階的表象によって把握することが、むしろ考古学にとっては第一の必要条件であろう。現実に、１９世紀初頭における「三時期法」の確立こそは、まさに近代考古学の出発となった。すなわち、「考古学の発達に於いて三時期法が演じた役割は、極めて甚大であって、学術的『考古学』の成立と発達とは、主として三時期法の創案に負うている」（註４）といわれる所以である。

わが国においても、近代考古学はこの段階的把握によって出発している。以来、縄文時代の性格の把握は、まず、それを世界史的な文化の系列の中で位置づけようとする傾向があり、従来、それには様々な段階説があった。いま、これらを概観し、学史上において大きな影響を与えた主なものを挙げてみると、その基礎的な観点によって、次の三種に大別することができよう。

Ⅰ　道具の製作技術による段階説
Ⅱ　生産形態による段階説
Ⅲ　社会組織による段階説

もちろん、これらの観点は元来有機的に統合されるべきものであるが、当初よりこのような分析・総合的な認識があったわけではない。考古学の発達過程において、それぞれの提唱者が時代の進展とともに次第に新しい観点を追加していったのであって、これらの観点が相互に複合し、併立し、あるいは混乱している場合が多いのである。しかし、文化の段階的把握それ自体は、もともと便宜的・手段的な設定である。その概念規定が不明確であっては、それによって把握される文化内容や歴史的意義、そしてその仮説的概念そのものの有効性さえ吟味できない。ここでは、以上三つの観点によって整理し、その中で果して縄文時代がどのように定着されてきたかを見究めておきたい。

Ⅰ　道具の製作技術による段階説

1.　トムゼンの「三時期法」

これは、もともとデンマーク国立古物博物館において提唱されたもので、その古物収集委員のシモンゼン（V. Simonsen）が、すでに1813年に、スカンナビア地域における文明の歴史は、「石の時代、銅の時代、鉄の時代に分けることができる」（註５）といっている。ただ、この創唱は、当時の学界ではほとんど問題にされなかった。

次いで、その国立古物博物館の監査官になったトムゼン（C. J. Thomsen）が、１８１９年に、その莫大な収蔵資料を石器時代、青銅器時代、鉄器時代の三時期に区別し、これを文化の発展段階として展示公開した。頭初、この画期的な展示法も当時の学者の注意を引かなかったが、１８３６年に、トムゼンが博物館の案内書として、この三時期法に基づく発展段階説を紹介した『北方古代学入門』（註６）を公刊するや、にわかにヨーロッパの学界が注目するに至ったのである。

とくに、この「三時期法」は、彼の後継者であるウォルサエ（A. Worsaae）によって、より完全に整備され、大いに普及された（註７）。しかも、彼は実地における発掘調査によって、北欧の古代文化の様相を明らかにしつつ、三時期法の妥当性を証明したのである。

このトムゼン＝ウォルサエの「三時期法」の特色は、まずその視点が「利器の主たる素材」におかれている。しかも、スイスの湖底遺跡やデンマークの泥炭層遺跡において、上部層から鉄器、中部層から青銅器、下部層からは石器を発掘し、ここに人類の文化は、石器時代→青銅器時代→鉄器時代と発展したことを層位的に確認したことにある。

この「三時期法」は、すでに明治１０年に、『古物学』（註8）という翻訳本によって、日本にも紹介されている。以来、日本の考古学界においても、その草創期より三時期法の影響が強く、坪井正五

郎、三宅米吉、浜田耕作などの先駆者たちが率先して採用した（註9）。ただ坪井正五郎は「人類ハ必シモ三時代ヲ経過セズ」とか、「三時代ノ順序ハ不自然ナリ」とか、あるいは「石器時代ナル語ニハ年歴ノ意味無シ」とし、「欧羅巴二三ノ地方ニ三時代変遷ノ跡アルハ、単ニ是等ノ地方ニ於テ偶マ斯カル変遷有リシトノ事ヲ証スルノミ」（註10）と、きわめて批判的・傍観的に受け止めている。

しかし、その坪井でさえ、日本の縄文時代には「石器時代」という用語を用い、以来、当然のごとく縄文時代は石器時代に属するものと認識されている。その端的な現われとして、「縄文石器時代」という用語さえ一般化していたのである（註11）。

2. ラボックの「旧石器」と「新石器」

かって1861年に、フランスのラルテ（E.Lartet）がドルドーニュ地方の遺跡を中心に調査した結果、石器時代には「打石器の時期」と「磨石器の時期」とがあると主張したことがある。これは1846年に、フランス西部のアベヴィーユ付近の遺跡を調査したペルテ（J.B.de Perther）が、洪積世にも人間が存在し、打製の粗雑な石器を使用していたことを立証（註12）して以来、最古の石器時代を追求する気運が昂まっていたからである。

イギリスのラボック（J.Lubbock）は、この新しく発見された洪積世に属し打製石器を伴う時代を「旧石器時代」とし、従来知られていた沖積世に属し磨製石器や土器を伴う時代を「新石器時代」と呼ぶことを提唱した（註13）。このラボックの区分は、その基準として、石器の磨製技法と土器の製作技術の有無によって分ける技術的観点に、それぞれが属する洪積世と沖積世という地質年代の相違によって把える層位的観点が加わっている。

このラボックの四時期法も、実はE.S.モースによって、明治11年（1878）、すでに日本に紹介されていた。すなわち同年6月2日、新発見の大森貝塚について、「日本人が組織して居る考古学倶楽部で講演すべく招かれた」モースは、その席上、「旧石器時代、新石器時代、青銅器時代、鉄器時代と、ラボックが定限した欧州の四つの時代に就いて語」ったという（註14）。

しかし、当時の日本にはこの説を受け入れるだけの前提はどこにもなかった。「東京人類学会」の創始者である坪井正五郎でさえ、明治30年ごろまでは、もっぱら「考古学上ノ三時代トハ、石時代、青銅時代、鉄時代ノ事」なりといい、「日本石器時代遺物中ノ著明ナル物ハ石器及ビ土器ナリ。石器ニ打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、石棒等アリ……」（註10）とあって、旧石器・新石器の区別はしていないのである。

この旧石器・新石器の区別を正式に取り上げたのは、明治31年に、「日本考古学の概述書としては最初のもの」といわれる八木奘三郎の『日本考古学』（註15）において、エヴァンス（J.Evans）の創唱として紹介されたのがはじめてであろう。明治42年になって坪井正五郎は、「人に由ると新石器時代とは磨製石器の時代、旧石器時代とは打製石器の時代で有るかの如く説いて居りますが、事実はそうでは無く、新石器時代の石製利器は主として磨製及び精巧な打製で有りますし、旧石器時代の石製利器は主として粗造な打製で有ります」（註16）といっている。しかし、彼自身は縄文時代に対して常に石器時代という用語を用いながら、ついに「新石器時代」と呼ぶことはなかった。

大正時代に入ってからは、浜田耕作は「日本に於ける石器時代は此の新石器時代に属するものなり」（註9）といい、後藤守一は「我が国には旧石器時代は存在せず、新石器時代のみであった」（註17）と述べている。また大場磐雄は「新石器時代＝日本縄文式土器時代」として把握している（註18）。たしかに、ラボックの区分によれば、縄文時代は沖積世に属し、しかも磨製技法や土器製作技術を有しているので、その点では「新石器時代に比定するのもあながち誤まりではなかろう。

しかし、その「新石器時代」の概念も、旧石器時代の研究が活発になり、その文化の内容が次第に明らかになるにつれ、またその概念が各地に普及するにつれて、各地の文化の地域性を反映しつつ微妙に変化していった。従来の沖積世における現世動物の伴出や、磨製石器や土器の出現以外に、地域によっては農耕・牧畜の開始とか、巨石墳墓の存在などの要件が加えられ、その概念規定はますます多様化していった。したがって、現在ヨーロッパで一般に使われている「新石器時代」の概念をもって、そのまま日本の縄文時代に当てはめようとすると、そこには当然ながら種々の矛盾と混乱が生じてくるのである。

3. ド・モルガンの「中石器時代」

従来ヨーロッパにおいては、旧石器時代と新石器時代との間の、あまりに永い時間的空白が問題となっており、カルテラック（E.Cartailhac）らの「溝渠学説」（Hiatus theory）などが唱えられていたという。ところが１８８７年、ピエット（E.Piette）によるフランスのマス・ダジール洞窟における発掘調査以来、旧石器文化にも新石器文化にも属さない過渡期的・中間的な文化が続々と発見されるに至った。

かって、1860年代後半に、地質学者のトレッル（O.Toretl）によって、「中石器時代」という用語が案出され、イギリスのウエストロップ（H.Westropp）などは、1872年にすでに、河成漂礫層や洞穴から出土するフリント製石器を旧石器時代、地表面採集のフリント製石器を中石器時代、敲製、磨製の石器を新石器時代に当てている。そのほか１８９２年には、イギリスのブラウン（A.Brown）が、タルドノワ期やデンマークの貝塚期のような中間時代は中石器時代と呼ぶべきであると提案した（註19）。とくに、イーストボーン付近のバーリンゲ・ギャップにおける白亜質河原石（cheek rubble）の中に、その代表的なものが発見されているという。しかし、これらの提唱も、当時一般には採用されなかったようである。

ところが、1909年、フランスのド・モルガン（J.de Morgan）が、その著『初原文化』（註20）において、前述のブラウンと同じような意味で、旧石器と新石器との過渡的・中間的文化を「中石器時代」と命名した。それ以来1930年代までは、各国の学者の間で一般化していたという（註21）。

この中石器文化の特徴としては、まず「それは第四氷期の終りごろから沖積世の前半にかけて発達したものであり、狩猟・漁撈の生活をいとなんでいた。旧石器文化との差異をみれば、漁撈の発達（骨製釣針・舟の使用）がみとめられ、とくにマイクロリスあるいはピグミイトウールとよばれる細石器を用いた合成器具（Composite tool）の存在が一般的となっている」（註22）という。

しかし、この中石器時代に属するといわれる各地の文化様相を具体的に検討してみると、たとえば、「後半のカルピニアンや貝塚文化にはわずかながら土器の発生もみとめられ、また後者には磨製石斧も用いられている」（註22）など、それぞれ多様化していて、その年代も系統も内容も一括して捉えることが困難であると同時に、すでに不合理にさえなっている。

わが国においても、すでに大正１４年に、大山柏によって学界に紹介されている（註23）。しかし、その研究が一般的になったのは昭和１０年代に入ってからで、しかもその概念規定が煩雑であり、それに該当する具体的な文化様相を発見できなかったためか、わが学界には定着しなかった。

ただ、昭和１１年に八幡一郎が、「剝片石器多きこと、それに礫核石器並びに礫塊石器の加わり、僅少乍らも磨製石器の加わること、殊に貝塚期に巻上作り深鉢尖底の土器の発現すること、貝塚が形成せられ初めたこと」など、ヨーロッパの中石器文化との類似点を挙げて、「縄文式文化中、殊にその初期に中石器文化的様相が認められる」ことを強調した（註24）。しかし、当時「多くの学者はこれに冷笑をもってこたえただけであった」という（註22）。

以上のように、従来のヨーロッパにおける「利器の主たる素材」を中心とする発展段階説によって、縄文時代の具体的な文化表象を位置づけようとすると、種々の矛盾や混乱が生じてくる。それは、文化表象のどこに値価判定のポイントを置くかによって、捉え方が変ってくるはずであるにもかかわらず、「縄文文化の大部分は、時期的にはあきらかに新石器時代にちかく、土器・石器の点では新石器時代である。そのような意味では、この文化は新石器時代的文化といえよう」（註25）という、きわめて曖昧なところに落着いている。

しかし、ここで改めて確認しておかねばならないことは、トムゼンやラボックの段階説を、ただ単に、打製石器、磨製石器、青銅器、鉄器という「利器の主たる素材」による分類や、それらを各時代の文化的表象として把えたものとするのは、至って皮相的な解釈であり、本質的な誤診である。なぜならば、まず第一に、この分類の基礎は、ただ単に利器の素材としての石や銅や鉄という物質にあるのではなく、実はそれを加工する人間の技術の問題にある。すなわち、「実用的利器が根拠とされるのは、それが当代の技術的水準を敏感に反映するからで」、「三時期法の心髄は、実用的

利器を通じて看取された技術史的時代区分にある」（註４）ことである。

そして第二に、これらの時代区分の根底には、常に発掘調査によって地質学的・層位学的な確認がなされ、実証が伴っているということである。この点、この段階説はすでに考古学における層位的編年学の根源をなしているということを、われわれは特に銘記しておく必要があるだろう。

ところで、ラボック以来の旧石器時代・新石器時代の区別は、むしろ「後者が農耕・牧畜というような食物生産に、前者がそれに対して狩猟、漁撈及び採集といったような食物採集経済の時代であったとされている」ところにこそ本質的な意義があり、したがって「わが縄文時代を新石器時代だとしている者があるのは時代逆行の感がある」という指摘もある（註26）。しかし、これはラボック自身の観点ではなく、その後ヨーロッパの学者が順次追加していった観点が、今日のわれわれの認識の中で複合し錯綜しているにすぎない。そこで、当然波及する問題として、次の項では「生産形態による段階説」について、その本質的な課題をさぐってみたい。

Ⅱ　生産形態による段階説

１９１１年ごろ、マンチェスター大学のエリオット・スミス（G.E.Smith）は、食糧生産を基底とした古拙文化は、多元的に発生したのではなく、エジプトを発祥地として、それが各地に伝播したものであるという、一元的な「文化伝播説」などが提唱された。これが大いに喧伝され、それを支持する一派は「マンチェスター学派」と呼ばれた。

この文化伝播説から着想をえた若きチャイルド（V.G.Childe）は、１９２５年に、エジプトを含めたオリエントが食糧生産の発源地であり、そこからの波状の文化伝播によって、ヨーロッパ各地に新石器文化が成立したことを、遺物や遺跡の発掘事例によって証明した（註27）。これは、ヨーロッパ中心主義に安座していた当時の学界に大きなショックを与えたらしい。ここで注意すべきことは、このときチャイルドは、「三時期法の一般的な基準、すなわち磨製石器、現生動物相、あるいは家畜、農耕などの要素から、新石器時代を初期の旧石器や中石器と区別するものとして、『食糧生産』を選び出した」（註28）。それ以来、従来の三時期法に対して批判的な態度をとり、新しい段階説を提案するようになったのである。

同じく三時期法に反論した学者の中に、イギリスのケンドリック（T.D.Kendrick）がいる。彼は１９２５年に、その著『斧時代』（註29）において、古代文化は、人類が狩猟の段階から農業の段階に移行したときにこそ一大飛躍をとげた。旧石器時代人が狩猟生活であったのに対して、新石器時代人は農業生活であった。両者を単に冶金術がなかったというだけの理由で、同一の範疇に入れるのは明らかに不当である。新石器時代こそは、後続する金属時代の前哨であるから、旧石器時代とは截然と区別し、"Eochalcic"と呼ぶべきであるというのである。

ここに、文化の発展段階というものを、従来のような単なる技術的な面から捉えようとする態度から、その生産形態によって把握しようとする観点への転換が明らかにうかがえる。その先駆となり、当時のみならず今日においても多大の影響を与えている代表的な段階説を二・三挙げておかねばならない。

1.　モルガンの「野蛮・未開・文明」

モルガン（L.H.Morgan）の『古代社会』（註30）は、「一部は人類発展の全過程にわたって行われた数多の偉大なる発明と発見の系列」から、「しかし大部分は、特定の観念および感情の発達を示すところの家族的諸制度」から抽出されたものである。したがって、その主たる内容はむしろ次の項において取り上げるべき性質のものであろう。

しかし、その第１の観点に基づく段階説は、従来にはみられなかった総括的な把握であり、しかもその生産技術による時代区分は、後に述べるマルクス＝エンゲルスやチャイルドなどに多大の影響を与えた、一種の唯物史観的把握として、ここに触れておかねばならない。

モルガンの特色は、まず「人類種族の歴史は根源において一であり、経験において一であり、進歩において一である」という、進化論的原則論に基づいている。そして、「アメリカ・インデアン部族の歴史と経験とは、それに対応する状態にあった時代のわれわれ自身の遠い祖先の歴史と経験とを、多少ともそれに近く示」し、「彼らの制度、

技術、発明および実際的経験は人類の記録の一部を形成するもの」だという観点にある。

ところで、モルガンも、かってデンマークの考古学者たちが提唱した「三時期法」は、たしかに、ある特定な目的や古代技術品の分類のためにはある程度有効であろうが、それらの各時代が互に重複し錯綜しているので、「それぞれを独立した別個の時代とする限界を認めることは不可能である」としている。むしろ「長い間隔をおいて継続的に出現した生活技術は、それが人類の生活状態に与えたに違いない大きな影響からいって」、三時期法などよりはるかに満足すべき根拠を与えるだろうという。すなわち、「進歩の十分な標準をあたえて継続的な種族時代の開始を特徴づけるような他の発明や発見を選択することによって」、「その各々が独自の文化を包括し、かつまた特殊の生活様式を表示する」ような時代区分として、次のような三つの段階を提示したのである。

(1) 野蛮時代

限定された居住地における果実および草根による自然食と魚食生活の時代

下層状態……人類の揺籃時代とともにはじまり、本来の限定された居住地に住み、果実と木の実を食用とした。有節言語の開始はこの時代に属する。

中層状態……魚類を食糧として獲得し、火の使用とともに始まる。本来の居住地から地球上の大部分に拡がった。

上層状態……弓矢の発明とともに始まり、製陶技術の発明とともに終る。

(2) 未開時代

栽培による澱粉質食糧、獣肉および乳、田野農耕による無限の食糧獲得の時代。

下層状態……本来の発明にせよ、他からの導入にせよ、陶器の製作・使用とともに始まった。

中層状態……東半球においては動物の飼育とともに、西半球では灌漑による栽培および建築における日乾煉瓦と石材の使用とともに始まる。

上層状態……鉄鉱の熔解法発明とともに始まる。

(3) 文明時代

音標文字の発明および文献的記録の製作とともに始まった。

この段階説は、あくまでも「発明および発見を通しての知力の発達」に視点を置いているが、その中には、おのずから技術的観点と生産形態の把握とが融合されている。しかも、この提示の背景には、その時代を構成する人間集団の存在が前提となっており、各々の発展段階に対応する家族形態や社会組織が取り上げられ、それに伴う財産問題から政治形態まで論ぜられている。これについては当然、のちに改めて触れなければなるまい。

2. マルクス＝エンゲルスの「抄録」

このモルガンの『古代社会』が、マルクス（K.H.Marx）やエンゲルス（F.Engels）に、「きわめて根本的な研究」として高く評価され、これに基づいて『資本制生産に先行する諸形態』（註31）や『資本論』（註32）における原始社会論に大きな修正を加えるなど、多大の影響を与えたことはあまりに有名な事実である。とくにマルクスは、その晩年にモルガンの『古代社会』を熟読し、その抄録を丹念に書き残した（註33）。この遺稿をもとに、マルクスの死後まとめ上げられたのが『家族・私有財産・国家の起源』（註34）である。

それによれば、「マルクスが40年まえに発見した唯物史観を、モーガンはアメリカで彼なりに新たに発見したのであり、それによって、未開と文明とを比較するさいに主要な点でマルクスと同一の結論に到達した」という。しかも、「モーガンは、専門的知識をもって人類の先史に一定の秩序を与えようとした最初の人である」といい、その「野蛮・未開・文明」という三つの段階区分は、「生活手段の生産の進歩に応じた区分である」と捉えている（註34）。

なぜならば、モルガンのいうとうり、「生産における熟達は、人類の優越性と自然支配の度合いにとって決定的」であり、「人類進歩の主要な時期は、すべて生活資源の拡大の時期と多かれ少なかれ直接に一致する」からだという。ただ、「家族の発展は、これと並行して進むが、しかし時期区分にとってはそれほど的確な指標を与えるものではない」という（註34）。

さて、このモルガンの三つの区分において、わが縄文時代は、果していかなる段階として捉えるべきであろうか。縄文時代には、すでに土器の製作技術が知られていたが、まだ動物の飼育や灌漑による植物栽培などが行われた確たる証拠はない。

したがって、縄文時代はモルガンのいう「未開時代の下層状態」に止まっていたことになる。

ただ、ここで注意すべきことは、モルガンは、「製陶技術の発明あるいは実行は、あらゆる事情を考慮してみるに、野蛮と未開との間に境界線を定めるために選びうるおそらくもっとも効果的かつ決定的な条件であろう」といい、「製陶技術の創始は生活の改善および家庭生活の便益の増進にむかって人類進歩の上に新紀元を画した」といっている。その「進歩の基準」とする具体的な根拠については、「陶器の製造は、村落生活および単純な技術のかなりの程度の進歩を前提とする」とか、「陶器は食物を煮沸するための耐久的な容器を与えた」という説明があるだけで、その点は、たしかに「専断的であることをまぬかれない」。

しかし、この土器製作の存否は、食糧の貯蔵や保存、集落の定着性、集落間の交流などの問題と密接な関係があり、きわめて重要な要素である。しかも、現在わが国において、「先土器時代」と縄文時代とを区別する本質的な基準となっている。その起源がこのモルガンの観点にあることを、われわれは銘記しておく必要があるだろう。

3. チャイルドの「革命」による段階

チャイルドは、まず生物の器官の進化と人類の文化の進歩との類似性を示し、「歴史家のいう進歩とは、動物学者のいう進化と同種のものである」とし、「歴史上の変革は、それが、われわれ人類の存続と繁殖に役だった度合によって、判定できる」という。すなわち、進歩とは、農耕の開始とか、金属器の発明とか、産業革命などのような、人口の増加をひき起した現象を意味しており、「文化におけるこの進歩を研究するのが考古学である」という(註35)。これは、明らかに合理主義的進化論に基づくものである。

また、「考古学は人間の経済や社会的生産制度における急激な変革を追求できるし、また追求するものである。これらの変革は、唯物史観が歴史上の変革における要素として主張するものとおなじ種類のものである」(註35)ともいう。これは明らかに、モルガンやマルクス＝エンゲルスの影響を示すものである。そして、「考古学ならびに文献史料によって明らかにされるながい全過程を眺めると、単一の指向方向がもっとも明瞭に現われるのは経済的領域、すなわち、もっとも先進的な社会が生活資料をかくとくする方法においてである。この経済の領域では、急進的であり、真に革命的な革新を認めることが可能であろう」という。

このチャイルドのいう「革命」とは、おもに生産技術の変革を意味しており、それを「歴史過程のうえの段階」として捉えるため、従来の「三時期法」とモルガンの段階説とを融合し、チャイルドは次のように統括しているのである(註36)。

(1) 食物採集段階（＝旧石器時代の野蛮文化）

地質学者のいう「第4紀」に相当、約50万年前または25万年前から、珍しい動物、食糧収集者として人類が出現。自然が提供する食物なら何でも捕え、収集し、他の動物への寄生生活を営む。それが、人間社会に開かれた生活資料の唯一の源泉であった。すなわち、その生活は狩猟、漁労および野生の果実、根茎、地虫、貝などの採集にたより、その人口は大自然が人間に与える食糧の供給によって制限された。

(2) 新石器革命（＝新石器時代の未開文化）

おそらく8,000年を超えない以前から始まる。食糧生産の経済により、自からの食糧供給を支配した。近東地方では、初めて自然との積極的な協同作業により、植物の栽培あるいは家畜の飼育によって、食糧の供給を増加しはじめる。しかし、少なくとも経済的な意味では、新石器文化は一つの限られた時代に照応するものではない。ただ、この革命の結果として、人口が非常に増加した。

(3) 金属器革命（都市革命）（＝文明時代）

ナイル、チグリス＝ユーフラテス、インダスの諸河の沖積平野において、約5,000年前、河辺の村々が都市に変貌したことに始まる。農民はその家族の需要以上の食糧の余剰生産を強いられ、その余剰分は専門化した職人、商人、俗侶、将軍、官吏などの新しい都市人口を養うために用いられた。文字を書くことは、この都市革命の必然の副産物であり、この都市革命こそ「文明」を導き入れ、歴史の記録を初めてつくる。すなわち、

イ、銅器時代の高度未開文化（＝青銅器時代）
ロ、初期鉄器時代
ハ、ヨーロッパの封建制時代
ニ、産業革命

などの変革の時代がこの中に含まれるという。

ところで、この時代区分は「地質学的記録の大区分と同じ汎地球的な意味」をもつものではない。むしろ、「中生代、新生代、第三紀始新世、洪積世といった地質学上の代や世と同じ絶対的な価値を、考古学の時代に与えることは、それがいくら大区分だからといっても、無意味なことだ」という。たとえば、「新石器時代」を区分する基準において、「食糧生産の開始は、斧の刃づけ法としての磨研法の採用にくらべ、疑いなくいっそう重大な社会生活上の変化であったし、また文化のあらゆる面にいっそう深い影響を与えたものである」。

しかし、その基準を実際に適用するには、「僅かばかりの骨から野獣と家畜を見わけることは容易でないし、植物質食糧の実物遺体は例外的な環境しか保存されていない」から、いろいろと問題が多い。そこで、「かっての先史学者は、この実際上の困難をきりぬけようとして、すべての農民は土器を作り殆んどの農民は磨製石斧を作ったと信じた」（註37）ことがある。

それに対し、1950年以来の各地における考古学的成果は、そのような観念的な把握とはうらはらな新事実を次々と明らかにしていった。たとえば、パレスチナやキプロスなどの最古の農民たちは土器をもたなかったし、少なくともパレスチナの最古の農民は斧も磨製刃をもつ石製利器も作らない。逆に、北方ユーラシアの針葉樹林地帯では、立派な土器と磨製の石製工具類一式をもっていながら、食糧植物の栽培を全く知らず、また犬以外には家畜を一切飼っていなかったらしい。そして、デンマークやスーダン地方では、新石器農民が出現する以前に、すでに地方的な土器製作が行われていたことが判明した。したがって、「土器製作はかならずしも食糧生産と結びつくものではなく、食糧生産の信頼するに足る指標とみなすことはできない」とチヤイルドは結論している（註37）。

ところが、こうした認識があるにもかかわらず、逆に、日本の考古学者の中には、縄文時代にはすでに農耕が始まっていたことを前提とする者が現われ、現今、それが一つの新しいブームを呼んでいる。もちろん、縄文時代の文化様相からみて、果して農耕がおこなわれていたかどうかを、あらゆる角度から検討してみる必要があり、それには当然、それだけの必然性や基本的な観点がなくてはならないはずである。

4. 藤森栄一の「原始農耕論」

縄文時代に、原始的な農耕が存在していたか否かの論考は、すでに昭和2年、大山柏によってその発端が開かれていた（註38）。すなわち、大山柏は神奈川県・勝坂遺跡の発掘調査の際、その出土遺物の大半を占めていた打製石斧について、次のような考察をおこなっている。

「これは通常の石斧とは、其趣を異にして居」り、「大さも略一定し、肉厚薄く従って重量軽く、打割の一要素を欠いて居る」点から、用途はむしろ「土掻き」（振＝Hache＝Hoe＝Pioche）であろう。「元来新石器時代に於て土掻きの存在することは、独り我国に存するのみでなく欧州其他に於ても多く認むる所であって、石斧と土掻きとでは、其使用法を異にするものとせられて居る」。そこで、「スイスの新石器時代湖上生活跡の如き、泥炭層により遺物を保護せられた結果、穀物、果実等の一部を発見し、土掻き、石皿、敲き石及至石杵等からして、原始農耕を認められる。我国の如きは、未だ適確なる発見はないにせよ、既に穀物と覚しきものは発見せられて居るし（註39）、他には石杵も石皿もある。而して直接農具として、土掻きありとすれば、原始農耕の存在は可能である」というのである。

しかし、当時の日本考古学界は、土器型式の層位的編年に夢中になっており、この大山説に対し「何の反響も批判もないまま、20年以上も放って置かれた」という。それもそのはず、昭和7年頃から森本六爾を中心に、弥生式文化の水稲農耕論が出現し、「激しい論調で学界をゆさぶった」にもかかわらず、これさえ昭和11年に、奈良県・唐古池遺跡が現実に掘り出されるまで、ただ黙殺されたままだった。「いわんや、それより20世紀も遡ろうという、縄文中期の農耕論を再燃させようなどと言う人があろう筈はなかった」（註40）。

戦後、故郷の信州に帰った藤森栄一は、縄文中期の莫大な資料に接しているうちに、勝坂式文化の内容の特異性に不審を抱き、「これは弥生式的だと言う疑問に逢着し」、それを契機として、数年にわたり、「日本原始陸耕の諸問題」という覚書を発表した（註41）。それ以来、一貫して「原始農耕論」を主張し続けてきたが、その所論の中心的要旨を「縄文中期文化の構成」（註40）によっ

てまとめてみると、およそ次のとおりである。

まず、中部日本の山岳地帯を対象とし、中期縄文遺跡の性格を、A「其だしく狩猟聚落的でないと考えられる資料」と、B「むしろ農耕的であると考えた方が素直な諸現象」によって捉えている。

A　非狩猟的現象

(1) 石器の一番いらないとき、 — 一般に石鏃の出土例が極めて多い地帯で、前期や後・晩期には多いのに、中期には極めて少ない。

(2) 石匕の大型粗製化。 — 石匕（皮剝ぎ）が最も鋭く整った形になるのは前期、中期には打石斧なみの技法や石質に変ってくる傾向がある。

(3) 磨石斧の減少。 — 特に小型の磨石斧が、その前後の時期に比べてはるかに少ない。

(4) 生活立地選択の変化。 — 諸磯a期は湖辺川岸などの水添を選び、諸磯c期になると、俄然孤丘や山嶺、舌状台地などを選ぶ。元来、狩猟には谷や谷頭を利用するのが原則。広範な裾野や台地は不適なはずである。

B　農耕的現象

(5) 聚落の膨張

(6) 土掘具の盛行。 — 井戸尻式から曽利式期にかけて、俄然、打製石斧が爆発的に増加。これは鋤鍬のような掘り具で、植物採集用であることは否定できない。

(7) 石皿と石臼。 — 石皿は早期からあるが、中期になると整った形になり、製粉台と考えるべきである。石臼は比較的偏在するが、石皿と組んで、一種の製粉具と考えられる。

(8) 石棒と地母神信仰。 — 自然石による祭壇状の立石と石組、敷石住居址内の有頭石棒、屋下に立つ大型石棒など、いずれも御左口信仰に関聯し、土地生産の神として縄文中期まで遡る。

(9) 凹石の意義。 — 中期の出土量が最高で、竪穴内では多く炉辺から出土、発火具と思われる。それが遺跡周辺至るところに散乱するのは、当時、集落周辺の広範囲に渉って火が必要であり、恐らく焼畑農耕が行われていたのであろう。

(10) 女性像としての土偶。 — 中期に関する限り、すべて女性像で、乳房、臍、腰腹部の膨満など、生への祈り、生殖、生産、土地と連らなる願望がこめられていると思われる。

(11) 土器形態の組合せ。 — 勝坂期に入ると、まず煮沸用の甕形土器の形が安定。やがて豪華な意匠で飾られた鉢形や皿形、それに台付土器が伴い、供献形態が盛んになったと思われる。

(12) 貯蔵形態の発生。 — 煮沸形態や供献形態と共に、大抵1個づつ「蓋付樽型土器」が所蔵される。これは貯蔵形態で、「農耕社会に於ける種子貯蔵形態」と考えられる。

この「原始農耕論」に対しては、従来、賛否両論があって、さまざまな観点から議論が展開されてきたが、それについては後で詳しく述べるつもりである。ただここで問題となるのは、「縄文時代にいかなる程度の農耕も行なわれなかったか否かということではなく、当時の文化を性格づけたものが、いかなる生産形態であったかということ」（注42）である。すなわち、原始農耕的な生産が局地的・臨時的に存在したこと自体は、きわめて末梢的な問題である。むしろ、その生産形態が縄文時代の文化内容に大きな影響を与え、その発展段階を規定し、一つのメルクマールとなるような歴史的意義をもっていたかが問題なのである。

まず、藤森栄一の「原始農耕論」は、中部山岳地帯における縄文中期という、いわば特定地域における特定時期の特殊現象として捉えられている。その前後の時期における生成—発展—消滅の歴史的変遷や、周辺地域における影響、伝播などの有機的関連性の中で定着されていない。もし、そのような農耕生産が一旦生成し、発展したならば、それは決して局地的・臨時的な現象として、単独に存続し、突然に消滅するはずがないのである。第一に、中部山岳地帯の人びとが、当時その地域から全く移動もしないで、たとえば季節的に、すぐ近辺にある河川や湖沼の周辺で、狩猟や漁撈を全くおこなわなかったという根拠が、果してどこにあるのであろうか。当時の人間集団の行動範囲を勝手に限定し、その範囲内だけで文化の様相を捉えようとしているところに観点の狭隘さがある

また、遺物の増大や減少がそのまま生産の発展や消滅を意味するとは限らないし、遺跡数の増加が直ちに人口増加を物語っていると解釈するのもあまりに単純すぎる。まして、石器や土器、土偶や石棒などの遺物の表面的形象から、いきなり農耕具や焼畑や種子貯蔵や地母神信仰などを連想しそれを「原始農耕」の根拠とするのは、あまりに牽強付会というべきであろう。こうした連想的解

釈の可能性なら無数にあるのであって、その先入観や固定観念によって千変万化するので、なんらの決め手にもならない。根拠の稀薄な解釈の上に積み重ねられたいかなる推論も、所詮は砂上の楼閣にすぎないのである。

とくに、集落が所有する生産形態には、必ずやそれによって支配され、影響されながら、それを維持してゆくための集落内規制や社会組織というものが対応しているはずである。それがある程度において集落の形態を左右し、人間集団の性格を決定しているのであって、これは決して無視することのできない重要な要素である。この「原始農耕論」の中にも、この問題が取り上げられていながら、「石棒と地母神信仰」とか「女性像としての土偶」などのように、遺物の形象からいきなり民族学的成果に結びつけた類推的解釈がおこなわれている。これは原始農耕を肯定する者にも、否定する者にも共通しており、その論拠としては、常に社会組織に関する既成概念が前提として存在しているのである。

もとより、現在の観点からすれば、生産形態と社会組織とは有機的に統合されたものであり、これを無機的に切り離して論ずること自体が誤りである。しかし考古学自体の発展段階として、従来この社会組織の問題にまではなかなか到達できなかったのである。しかも現在、この方面の調査研究が立ち遅れており、科学的な根拠をもって考古学が定着しえたものは、まだ何もないといってもよかろう。むしろ、何もないからこそ、民族学や文化人類学などの研究成果に依存し、それに類似した断片的現象によって、飛躍的な類推・解釈をおこなっているというのが、悔わらざる現状なのである。

それならば、当然のことながら、その論拠となっている既成概念こそ問題である。いかなる説がどのように捉えられ、それが果して何の根拠となりうるかを検討してみなければならない。そこでいよいよ、Ⅲの「社会組織における段階説」に眼を転じてみる必要があるわけである。

ただ残念なことは、紙面の都合で、以下は次号にゆずらねばならない。　　（未完）

（千葉市加曽利貝塚博物館・学芸員）

（脚註）

(1) 鳥居竜蔵「有史以前の日本」東京、大正7年

(2) 杉原荘介『原史学序論』東京（昭和18年）において、歴史における「主体者」、考古学的資料たる遺物における「限定者」を意味する概念を「型式」（Type）と規定し、「限定型式としての堀之内式土器や弥生町式土器は、わたくしにおいてはそれぞれ堀之内人であり弥生町人である」という。

芹沢長介「縄文式土器」『陶磁全集』東京（昭和34年）において、「型式aはそこで生まれ、土器を作り、用い、死んだところの人間の集団を意味する」という。

(3) 清野謙次『日本考古学・人類学史』東京（昭和29年）に詳しく記述されている。

(4) 角田文衛『古代学序説』東京（昭和29年）

(5) Simonsen, V. "Udsigt over National-historiens oeldst og maerkeligsite Period-er" Bd. 1. (Kjobenhavn 1813)

(6) Thomsen, CH. J. "Ledetraad til nordisk Oldkundighed" (Kjobenhavn 1836)

(7) Warsaae, A. "Danmarks Oldtid o plystved Oldsager. og Grarhʃin" 1843

(8) 柴田承桂訳『古物学』東京（明治10年）

(9) 坪井正五郎「考古学者の所謂時代名称について」『史学雑誌』5－12（明治27年）

三宅米吉『日本史提要』東京（明治19年）

浜田耕作『通論考古学』東京（大正11年）

(10) 坪井正五郎「石器時代総論要領」『日本石器時代人民遺物発見地名表』東京帝国大学（明治30年）

(11) 甲野勇「関東地方に於ける縄文式石器時代文化の変遷」『史前学雑誌』7－3（昭和10年）

酒詰仲男『日本縄文石器時代食料総説』東京（昭和36年）

(12) Boucher De Perther, J., "Antiquités catiques et antediluriennes Mémoire sur Mndustrie primitive et les Arts á leur Origine" Paris 1846

(13) Lubbock, J. "Prehistoric Times Isted" London 1865

(14) E・S・モース著　石川欣一訳『日本その日その日』東京（昭和14年）

(15) 八木奘三郎『日本考古学』東京（明治31年）
(16) 坪井正五郎「原始石器(Eolith)及び原始式石器」『東京人類学雑誌』24−193(明治42年)
(17) 後藤守一『日本考古学』東京（昭和2年）
(18) 大場磐雄『考古学』哲学全集第16巻、東京（昭和10年）
(19) Brown,A."On the continuity of the Palaeolithic and Neolithic Periods,"1892
(20) Morgan,J.De,"Les Premières Civilisations Paris, 1909
(21) 角田文衛「考古学史1ヨーロッパ・アメリカ」『世界考古学大系』16、東京（昭和37年）
(22) 芹沢長介「縄文文化」『日本考古学講座』3、東京（昭和31年）
(23) 大山柏「欧米見聞記（第2信）」『人類学雑誌』40−2（大正14年）
(24) 八幡一郎「日本に於ける中石器文化的様相に就いて」『考古学雑誌』27−6（昭和11年）
(25) 鎌木義昌「縄文文化の概観」『日本の考古学』Ⅱ、東京（昭和40年）
(26) 後藤守一「考古学とはどんな学問か」『日本考古学講座』1、東京（昭和30年）
(27) Childe,V.Gordon,"Dawn of European Civiliyation" London,1925
(28) Childe,V.Gordon, "Social Evolution" London,1951
(29) Kendrick,T.D.,"The Axe Age", London 1925
(30) L.Hモルガン著 青山道夫 訳『古代社会』東京（昭和33年）
(31) カール・マルクス著 手島正毅 訳『資本主義的生産に先行する諸形態』東京（昭和38年）
(32) エンゲルス著 向坂逸郎 訳『資本論』東京（昭和26年）
(33) マルクス著 布村一夫訳『古代社会ノート』東京（昭和37年）
(34) エンゲルス著 戸原四郎 訳『家族・私有財産・国家の起源』東京（昭和40年）
(35) G.チャイルド著 ねず・まさし 訳『文明の起源』東京（昭和25年）
(36) G.チャイルド 著 今来陸郎・武藤潔訳『歴史のあけぼの』東京（昭和31年）
(37) V.G.チャイルド著 近藤義郎 訳『考古学の方法』東京（昭和39年）
(38) 大山柏『神奈川県下新磯村字勝坂遺物包含地調査報告』東京（昭和2年）
(39) ここでいう穀物資料とは、宮城県桝形囲貝塚や奈良県中曽司遺跡出土のもので、いずれも弥生時代に属している。
(40) 藤森栄一「縄文中期文化の構成」『考古学研究』9−4（昭和38年）
(41) 藤森栄一「日本焼畑陸耕の諸問題」夕刊信州11月20日（昭和23年）
藤森栄一「日本原始陸耕の諸問題」『歴史評論』4−4（昭和25年）
藤森栄一「石棒と原始農業」『農業信州』10（昭和28年）
(42) 小林行雄『日本考古学概説』東京（昭和26年）